

WebアンケートによるOGのキャリア形成に関する研究

A Study about the Career Development of OG by the Web Questionnaire System

本郷 健, 東明 佐久良, 田丸 直幸, 炭谷 晃男, 堤 江美子, 金城 光, 西川 裕子

社会情報学部社会情報学科

1. 研究の目的

昨年度、本専攻の卒業生に対して行ったキャリア形成の調査では、本専攻の卒業生のキャリア形成における特徴は「転職が少ないこと（71%）」、「キャリアアップの実践では、資格取得（56%）が最も多かった」などの特徴が明示された。本研究では、さらに質的特徴を明らかにするために、何人かの卒業生に対して、聞き取り調査を実施して、今後実施する調査のためのアンケート項目の見直しとともに調査方法の方向性を探ることを目的とする。さらに、本専攻へ入学が期待される指定校を中心とした高校のキャリア教育の現状を調査し、その実態を把握することを目的とする。

2. 活動実施報告

平成 23 年 5 月から、高等学校のキャリア教育実態調査アンケート内容の検討および作成を始める。

6 月：調査（発送法）

7 月：回収

8 月：集計・分析

卒業生のインタビューによる質的調査の実施

調査期間：2012 年 1 月から 2 月，3 月

3. 研究目標の達成状況

女性のキャリア形成の第一段階として、大学入試にける学部・学科の選択の実態を把握するため、入学前段階でのキャリア形成を指導する状況を調査によって明らかにした。

【調査概要】

調査対象校 300 校

有効回収サンプル 64 校

無効サンプル 5 校

有効回収率 21.3%

調査時期 2011 年 6 月

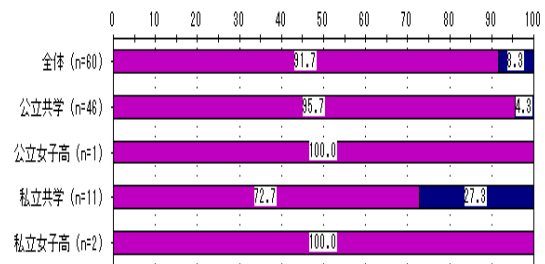
調査方法 郵送法

・調査対象校の校種

公立共学（48 校）、公立女子（1 校）、私立共学（11 校）、私立女子（2 校）と共学校が多くなっているのが特徴である。以下に結果の一部について述べる。

Q1-1 キャリア教育の実施

キャリア教育の実施度については 87% の学校ですでに実施している。「行っていない」はわずか 8% でしかない。実施状況について、校種別にみるとサンプル数が少ないが「私立共学」が「行っていない」割合が高い。



Q1-1 × 高専名

図 1 キャリア教育実施状況

Q1-2 実施頻度

実施頻度として最も多いのは「3 ヶ月に 1 回」が 28% と最も多い。なかには「週に 1 回」実施しているところも 12% になる。「3 ヶ月に 1 回」以上実施している学校は 53% と過半数にのぼる。実施頻度を理系コースの女子の割合とクロスしてみると、「週に 1 度」と頻繁に実施している高校は理系コースの女子の割合は「1 割未満」の学校が最も多い。逆に「3 割以上」の学校では、「3 ヶ月に 1 回」が 57.1% と最も高くなっている。理系コースの場合は、他のコースの学生に比べ指導の機会は少ないことがわかる。

Q1-3 キャリア教育の内容

「進路指導」が最も多い。つづいて「自己分析」、「就職指導」「適性の模索」「職業指導」が続く。

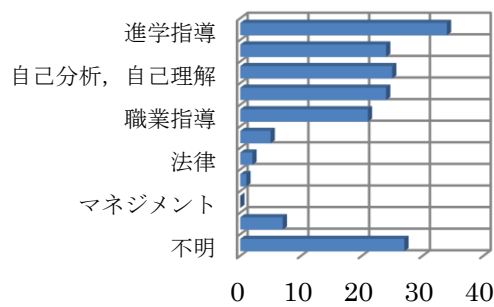


図2 実施内容

理系コースの女子の割合が「3割以上」及び「3割から2割以上」の高校では「進学指導」に重点が置かれ、「1割未満」では「自己分析」や「就職指導」に重点が置かれるようになる。

Q2-2 理系女子の増減について

全体の58%は「あまりかわらない」ではあるが、「以前よりも増えている」というのは25%。「以前よりも減少は」8%でしかなく、理系指向がつついており、専攻にとって明るいデータである。また、理系コースの女子の割合が高い高校ほど理系女子の割合が「増えて」おり、割合が低い高校では「変わらない」あるいは、むしろ「減少」という傾向を示している。

表1 理系女子の占める割合と増減

Q2-2理系女子の割合 × Q2-1理系コースの女子の割合

| 上段:度数 下段:% | | Q2-2理系女子の割合 | | | |
|-----------------|-----------|-------------|------------|------------|-----------|
| | | 合計 | 以前よりも増えている | あまりかわからない | 以前よりも減少 |
| Q2-1理系コースの女子の割合 | 全体 | 57 100.0 | 16 28.1 | 36 63.2 | 5 8.8 |
| | 3割以上 | 9 100.0 | 5 55.6 | 4 44.4 | - |
| | 3割未満~2割以上 | 14 100.0 | 5 35.7 | 9 64.3 | - |
| | 2割未満~1割以上 | 14 100.0 | 3 21.4 | 10 71.4 | 1 7.1 |
| | 1割未満 | 20 100.0 | 3 15.0 | 13 65.0 | 4 20.0 |

Q2-3 女子への理系コース選択の薦め

「あまり薦めていない」が44%であるが、「大いに薦めている」が20%と「薦めている」が36%と、合計56%と過半数が理系コースの選択を「薦めている」ことが明らかとなった。

Q4 大学選択の基準

加重平均をとって集計を試みる。「とてもあてはまる」は5点、「ややあてはまる」は3点、「あまり当てあてはまらない」は1点とする。その加重された平均を算出する。その結果は下図の通りである。

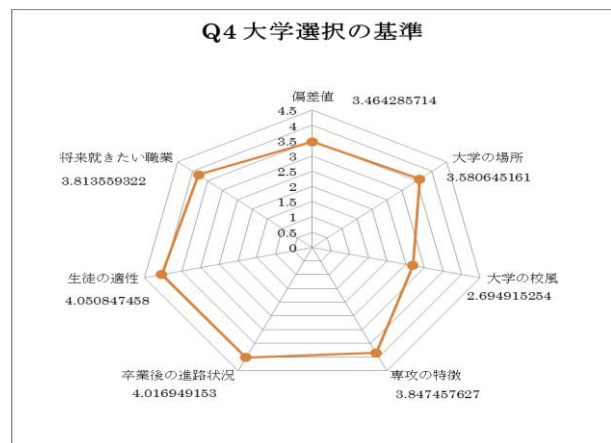


図3 大学選択の基準

結果をみると、4点を超えて高い基準は「生徒の適性」(4.05)と「卒業後の進路状況」(4.02)の2項目である。それに次いで、「専攻の特徴」(3.85)と「将来に就きたい職業」(3.81)になる。すなわち、キャリア形成を非常に重視した進路選択が行われていることが分かる。

次に卒業生に対する聞き取り調査について報告する。被験者は、卒業後5年以内の比較的若いOG達である。A氏は、私立高校の臨時採用教員として就職した。教職に就くため国立の教育系大学院へ進み、2つ目の教科の免許を取得しようとしている。院を卒業後は高等学校の非常勤講師をしながら採用試験の準備をしている。母校で2つ目の免許の取得を望んでいたが、本学では提供できない弱点がある。卒業後のキャリア支援制度を望んでいる。B氏は現在SEとして働いている。一時、現在と異なる職種への転職を考えたが、徐々に企業における地位を意識するようになり、同じ職種(SE)の転職を望むようになっている。教職等のライセンスを持っているので、教職も転職の視野に入っている。これらの事例のように、卒業後に転職やキャリアアップを考えるOGは、母校での支援を期待している。

4. まとめと今後の課題

大学選択の基準は、卒業後の進路と将来尽きたい職業に置いている。女子の理系志向は徐々に増加し、理系進学の手引も行われている。卒業生した情報技術系職種(SE)では、さらなるキャリアアップを希望している。母校へは、キャリアアップ支援に期待を寄せている。今後は、具体的な支援やその方法に就いて調査を深める必要がある。